



その子の育ちや学びを つなぐ

数量に親しむとは？

A児たちが車をまっすぐ、そして遠くまで走らせたい思いで、園庭にある道具を集めてコースづくりをしている。何度も走らせ、車を微調整。次の日には場所を国旗掲揚台に移し、長板に目盛をつけて走らせていた。お片付けの時間になると、タイヤの材料の前で何やら相談中のA児たち。「もつと使いやすくしよう」

保育者が大きな箱にどさつと準備した大量のキャップ。その仕分けが必要だという。「先生、箱ない？」

「ああ、これこれ！」色ごと、種類ごとに仕分けしていく子供たち。「あ、1個足りない」とB児。茶色のキャップが偶然にも99個集まり、驚き、悔しがる子供たちだった。

ちよこつとメモ



は様々ですし、一人一人の興味も違います。保育者として大切にしていきたいことは、それぞれの違いを肯定的に受け止めてつづき、今その子に育とうとしていることを丁寧に見とり、周りの環境への出会いを可能にしていくこと、一人一人の好奇心や探究心を支えていくことです。そのためにも、遊びの写真や記録を生かして子供の育ちや今後の保育方針等について保育者同士が気軽に話し合えるよう、園内外のリソースを大いに活用していくことが重要です。例えば、自治体が派遣する幼児教育アドバイザーを活用し、園内研修の活性化を図りながら、子供の育ちや遊びの重要性について、職員のみならず、近隣の園や小学校側、保護者等への発信につなげていくことも考えられます。そこで、子供の育ちを話し合う時などに手掛かりとなるのが「幼児期の終わりにまで育ててほしい姿(10項目)」です。例えば、本事例を(8)数量・図形等

への関心・感覚」を視点に対話してみようか。とどうしようか。(8)には「遊びや生活の中で、数量等に親しむ体験を重ね、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる(一部略)」とあります。体験を重ねるとは遊びの深まりに他なりません。いわゆる数の遊びと称した算数の前倒し活動を充実させることが数量に親しませることであるといった捉えでは、あまりに狭いと、職員同士で対話を通して確かめ合うことは肝要です。さらには、お互いの教育・保育経験についてまで話題が及べば、遊びの深まりとは何なのかと、対話の深まりも期待できるでしょう。

「4歳頃から何でも数えたがる子が増える気がするよ」「収穫したジャガイモの量に驚き数え出した子がいた」「5歳児の警察ごっこで、どのくらい速さで事件に駆けつけられるか、1、2つて数えて計っていたよ」

「目に見えない速さや時間についても関心が向く時期なのかなあ」「5歳児は子供の興味や広がり、どんな複雑な思考ができるようになる時期だよね」

「その子にとっての遊びの充実を支えることで、数えることや比較すること、に親しむ場面があちこちに生まれ、ていくんだね」

幼児期は、遊びや生活の中で、数えたり、比べたり、試したり、友達と考えたりしています。小学校では、そうした経験をすくいと、国語や算数等の学びへと発展させていきます。幼児期の架け橋プログラムは、園を小学校のようにすることではありません。幼児期に通した学びと、小学校にふさわしい教科等を通して学びを、子供一人一人の連続した育ちや学びとしてつなぐことであり、その実現を目指す、関係者が連携・連動を図ることが「幼児期の架け橋プログラム」です。